

古墳時代における塵尾の存否について

——中華文物の移入と「威信財」の実体——

門 田 誠 一

一 序

中華世界の社会と文化のなかでは、時代を反映して、所持者の教養や人品と一体化した階層性を示す器物や什器が存在する。塵尾はこの種の器物の一つであり、魏晋南北朝、より限定すれば六朝の時期に士大夫と呼ばれる人々の間で重用された。このような中華の古代文化の色濃い器物が、形態的に類似点のある木製品や人物埴輪の持ち物の認識を前提として、古代の日本にも移入されたという見解が提出されるにいたっている。

これに対して本論では朝鮮半島の新三国時代の遺跡や墳墓から出土した扇または塵尾とみられる木製品とも比較し、かつ中国でその流行をみた魏晋南北朝の史料に現れる塵尾も参照しつつ、日本における塵尾の存否を含めて、現時点での整理を行ってみたい。

本論での考察の中心は魏晋南北朝期に並行する日本の弥生時代から古墳時代にかけて、器物としての塵尾のみならず、それを含んだ文化や思想が流入し、かつ流布しているかどうかであるため、まず、塵尾ないし翳と理解されている木製品を中心に、東アジアの資・史料を参酌して吟味を行う。そして、このことを通して、古墳時代を中心とした首長制や社会の階層的検討のなかで、しはしばとりあげられる「威信財」なるものの存在の有無と実態

について、中華世界からの権威とその表徴という視点から検討の端緒を開くことを企図する。

二 素環頭把装具の諸例

古墳時代を中心として、木製威儀具と呼ばれている遺物が出土し、それらについて、後に検討するように、塵尾や翳を木質で製作した器物であるとする見解も示されている。ここでは先行研究の示すところを追いながら、とくに本論での考察の対象とする塵尾の類似品とされる器物の主な例を瞥見し、その後の考察の基本としたい。

弥生時代から古墳時代にかけて出土する木製威儀具のなかでも、「環形付木製品」あるいは「素環頭把装具」と呼ばれる類型が塵尾の柄の部分と関連して論じられることが多い。ここでは「素環頭把装具」の呼称として措定し、以下にこれまで知られている主な出土例を瞥見しておく。

①斗西遺跡^①（滋賀県東近江市・図1の2）

斗西遺跡は琵琶湖東岸の沖積地に所在しており、愛知川水系を中心とした湖東地域の拠点的な集落であり、弥生時代から中世にかけて継続する。斗西遺跡では湖から舟で内陸部へ至る運河と港湾施設とみられる施設も検出されている。木製品としては、準構造船の特徴を表した古墳時代の舟形木製品をはじめとしては、木製品の出土が顕著である。斗西遺跡で出土した素環頭把装具は報告書では「祭祀具」に分類され、「玉杖形木器」として記載されており、材を素環頭状に割り貫き、丁寧に削りだした後に黒漆が施されていると記述されている。残存長は一四・五センチである。自然河道（SD02）からの出土であるが、出土した層位によって、古墳時代前期から中期頃の遺物と推定されている。

②戸石・辰巳前遺跡^②（奈良県宇陀市・図1の3）

大宇陀地域の芳野川中流域に所在する遺跡群のなかにあつて、戸石・辰巳前遺跡では、とくに自然流路から古式

土師器がまとまって出土した遺跡である。この遺跡では自然流路（SD101下層）から多数の木製品とともに、「環頭形木製品」として報告されている環状の端部が付いた柄状の木製品が出土しており、本論でいう素環頭把装具として認識できる。この遺物は全面に黒漆が塗布されており、柄の装着部分には樹皮を巻いている。流路出土資料であるため、年代は確定をみないが、同じ流路から古式土師器がまとまって出土しており、一応は古墳時代前期と推定される。

③下田遺跡（大阪府堺市・図一の③）

下田遺跡は堺市下田町から鶴田町にまたがる弥生時代から古墳時代の集落跡であり、これまでの調査で、堅穴住居や墓、自然流路などから、土師器をはじめとする多量の土器や、スキ・クワなどの木製農工具のほか、蓋形木製品・威儀具・琴・短甲といったあまり出土例がない特殊な木製品が出土している。また、堺市域では五例目となる銅鐸が出土したことも注目を集め、すぐ西方にある弥生時代の拠点集落である四ツ池遺跡との関係が指摘されている。下田遺跡では素環頭把装具は流路（SD1108）から出土している。この遺物の樹種はイヌガヤで、木心部を中心に丹念に削り出された後、漆が塗られている。棒状の部分には糸を巻いた後に漆が施されているという。残存長さは一九・五センチである。報告書では、この遺物の残存状況から、別の部材と組み合わせて完成品となるものと推定している。素環頭把装具の出土した流路は古墳時代前期に属すると報告されている。

④久宝寺遺跡（大阪府大阪市・八尾市・図一の④）

久宝寺遺跡は河内平野における縄文時代から近代にいたる複合遺跡であり、弥生時代前期の集落や弥生時代中期（後期）の水田や堅穴住居跡、隣接する加美遺跡にかけて、古墳時代初頭の総数八〇基に及ぶ墳墓群などが検出されている。また、久宝寺遺跡では、昭和五八（一九八三）年に古墳時代初頭の「準構造船」が国内で最初に発見されている。外洋航海が可能とされる「準構造船」の出土によって、遺跡の北側に存在していた河内湖を利用した地域

間交流が想定されている。実際に古墳時代初頭～前期の山陰・吉備・播磨・阿波・讃岐・摂津・東海・北陸・南関東の他、朝鮮半島南部の特徴を持つ土器が発見されている。このような特色を有する久宝寺遺跡では報告書では「環形付木製品」とされている遺物が出土している。この木製品は形状的には下田遺跡出土品と類似し、表面に黒漆が塗布されており、古墳時代前期に属すと報告されている。

素環頭把装具として認識される木製品の代表的な出土例について摘要したが、素環頭把装具が出土した遺跡は当該地域においては、主要な集落遺跡と位置づけられている。これ以外にも、同様の形態の素環頭把装具は豊中遺跡（大阪府泉大津市）で出土しているが、出土状況等の詳細は明らかではない。^⑤

ここにあげた素環頭把装具の他に「団扇形木製品」と呼ばれる一群の木製品があり、新家遺跡（大阪府東大阪市）、西岩田遺跡（大阪府東大阪市）、勝山古墳（奈良県桜井市）、姫原西遺跡（島根県出雲市）、乙木・佐保庄遺跡（奈良県榛原町）^⑩その他で出土している。これらは柄の間に別の部材を挟む構造になっており、加えて柄の部分が長いことから、用途としては翳とされている。^⑪本論でもそれに従い、ここでは検討の対象とはしない。^⑫

これに対し、上述の素環頭把装具とされる一群の木製品については、環状部の付く部分は柄と考えてよいが、この部分のみでは羽毛等の装着の有無が不明であって、ただちに塵尾とは断定できない。

本論で具体的に存否を問う塵尾の場合は、その全体的な形態が重要なのであって、上述のような木製品の柄の部分はいずれの型式の場合も、手に執る塵尾ないしは団扇形器物の一部を構成する部分しか発見されておらず、これをもって塵尾そのものの存在を断ずることはできない。加えて、後にふれる朝鮮半島の原三国時代から三国時代の出土例と比較すると形態的に大きな差異がある。

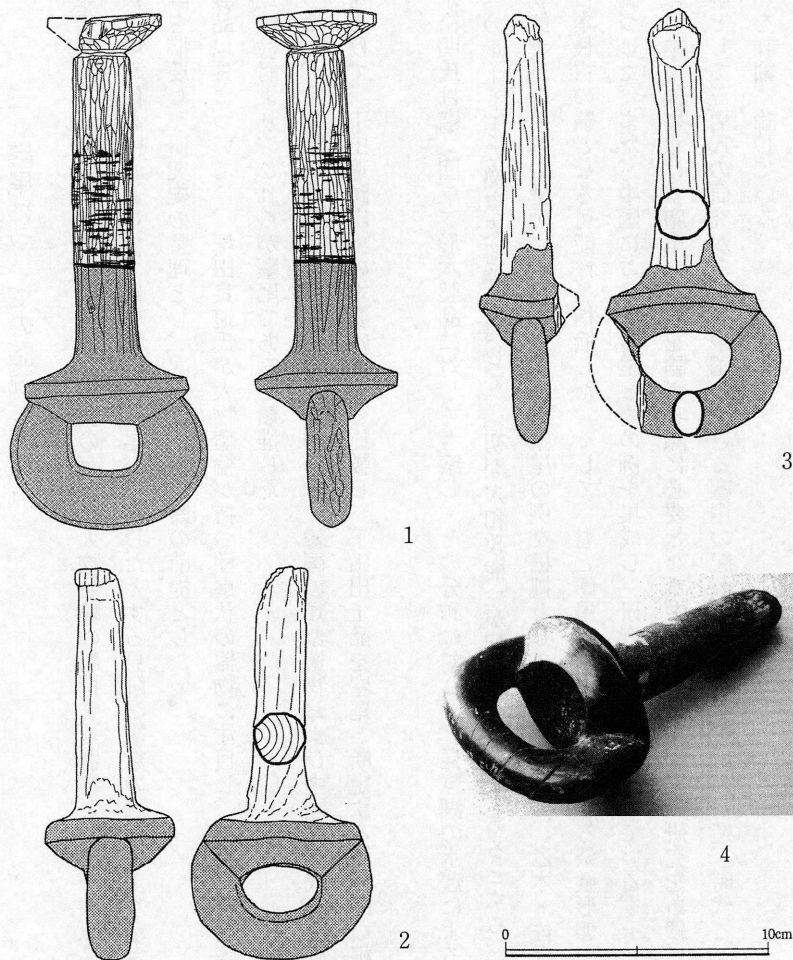


図1 素環頭把装具の例

1. 下田 2. 斗西 3. 戸石・辰巳前 4. 久宝寺
(4はスケールアウト)

三 塵尾についての諸説と問題点

前節で概術した素環頭把装具の主な出土例の存在は人物埴輪の所持する器物としての類似品の存在により、期的には古墳時代を中心として、日本古代に塵尾が存在したとする見解が複数の論者により示されている。次にそれらの論を摘要し、研究史の整理とし、次節以下の考察の前提としたい。

木製品以外については、塚田良道氏が人物埴輪が持つ団扇状の器物に注目し、中国の壁画等にみられる絵画表現との比較検討より、これらが塵尾であると類推した¹³⁾。

いっぽう、木製品については、藤田憲司氏が日本・韓国の類似遺物および中国魏晋代の壁画墓にみられる塵尾の図像をあげて、下田遺跡出土の木製威儀具と比較し、下田出土品を塵尾と断定する積極的な根拠は乏しいと結論づけた¹⁴⁾。

鈴木裕明氏は翳（団扇）形木製品に対して考察し、その分布に対して、琵琶湖の水運によるは日本海側あるいは東国へのルート上の拠点集落等に対して、「初期大和政権」が配布した器物であるとする。その淵源として、中国・朝鮮半島の墳墓の壁画に表現された翳や塵尾の例を根拠としてあげたうえで、乙木・佐保庄遺跡出土例が現状では日本最古の翳となる可能性を指摘した。そして、翳と塵尾とは中国に由来する祭儀形態の一部を導入したものと結論づけた¹⁵⁾。また、中国における塵尾と翳の例を集成し、研究史的整理も行っている¹⁶⁾。

次に日本古代における塵尾の有無を論ずる際に必要となる中国における塵尾の研究をあげておく。塵尾についての専論として王勇氏の研究があり、中国における塵尾の起源と具体的な形態と構造、時代ごとの使用法と意味の変化などを詳細に論じている¹⁷⁾。

孫機氏は塵尾の盛行時期と用途について述べ、後漢末から南北朝にかけて清談に用いられた道具であるとした。

形状については大鹿の尾毛を柄に装着したとし、柄は竹製、木製が一般的であるが、玉・犀角・象牙・玳瑁・塗金などもあることを示した。⁽¹⁸⁾

黄吉軍・黄吉博の両氏はもつともさかのぼる麈尾の表現として、後漢末から曹魏にかけての時期とされる洛陽・朱村壁画墓の例をあげた。史料上の麈尾の出現は西晋代とし、その意味としては高い身分を示し、あるいは指揮権を表すことを論じた。また、北魏石棺墓にみられる麈尾を例にとり、墓主夫婦を昇仙させるべく導く方士の持ち物であると位置づけた。⁽¹⁹⁾

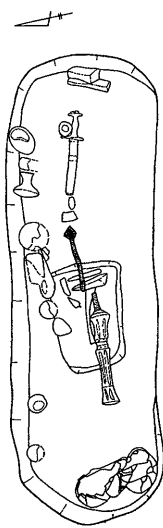
四 韓国の出土例とその評価

近年、羽扇が韓国の紀元前後から、三世紀頃までのいわゆる原三国時代遺跡から出土しており、東アジアにおいて、麈尾を含めた手に執る威儀具の東漸についての新知見として注目される。既報告の資料を中心として、ここでは韓国における麈尾の出土例を瞥見し、次項以下の考察に資することとする。

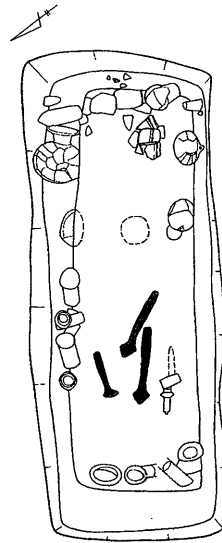
①昌原・茶戸里遺跡（慶尚南道昌原市・図2）

茶戸里遺跡では一号墓、一五号墓、二四号墓、三六号墓から黒漆塗りの「扇」の柄が出土していることが特記される。一号墓と一五号墓は盗掘坑からの出土であるが、二四号墓では、墓坑の中央部分から、羽毛が付けられていたとみられる部分を頭位の方向に向けた状態で出土した。⁽²⁰⁾ 周囲から出土した銅剣などの位置関係からみても、被葬者の胸部ないしは腹部に置かれていたと考えられる。三六号墓でも、三点の「羽扇」の柄が被葬者の胸の部分から出土している。⁽²¹⁾

これらの墓の造営年代については、茶戸里一号墓は出土した銅鏡（星雲鏡）・五銖銭などから、紀元前一世紀後半から、紀元前後にかけて、遅くとも紀元一世紀代には造営されたと考えられている。また、一五号墓、二四号墓



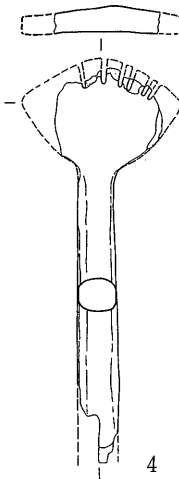
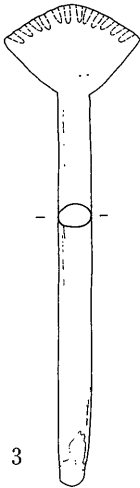
1



2



3



4



5

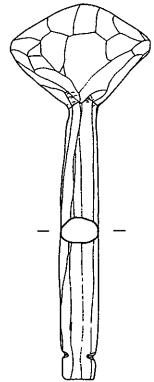


図2 韓国出土の塵尾（1）

- 1 昌原・茶戸里24号墓塵尾出土状況 2 昌原・茶戸里36号墓塵尾出土状況
2 昌原・茶戸里1号墓 4 昌原・茶戸里15号墓 5 光州・新昌洞遺跡

は茶戸里遺跡の墳墓の分類では、腰坑のある類型（報告書のⅠ類型）とされ、原三国時代の初期段階に位置づけられている。²⁵⁾

②星州・礼山里遺跡（慶尚北道星州郡・図3の1）²⁶⁾

二〇〇二年から二〇〇三年にわたって、星州郡礼山里と白川里にかけて、原三国時代（報告書では三韓時代とする）に属する四〇基の木棺墓が調査された。そのうち、三〇号木棺墓は、長さ一七八センチ、幅四二センチ（残存した深さ一〇センチ）程度の木棺を埋納していた。この木棺内から、漆塗りの「扇」とされる遺物が出土している。とりわけ、注目されるのは、その出土位置であって、被葬者の胸部の位置にあたり、「扇」の「骨」は腐食していたが、灰黒色の痕跡が被葬者の頭部側で確認されたという。さらに、被葬者の頭部付近から出土した柄の部分との位置関係から見ると、被葬者の顔を覆っていたと考えられている。報告文では「扇」とされているが、「骨」とされている部分がどのような有機質素材であったか詳報がまたれる。その点を留保するにしろ、茶戸里遺跡の出土例を参照すると、「羽扇」状の器物であったことが類推される。

三〇号墓のその他の出土遺物としては鉄環があり、被葬者の左腕手首の部分から出土している。その他、木棺外からは土器と漆器、鉄器類一四点が出土しているという。簡報の段階であって、造営年代については、今後の分析と検討によらねばならないが、現時点では礼山里遺跡の既発掘の墳墓は紀元前一世紀頃から紀元二世紀頃にかけての時期が考えられている。「扇」状の器物が出土した三〇号木棺墓は出土土器からみると、紀元前一世紀頃とされる五号木棺墓よりはやや遅れるとみられ、紀元前一世紀から紀元前後にかけて築造された可能性が考えられる。

③光州・新昌洞遺跡（全羅南道光州市・図2の5）²⁷⁾

湖南地域の低湿地遺跡として名高い新昌洞遺跡では工房と関連する場所から出土している。この遺跡は柴山江流域の沖積台地と低い丘陵地帯に位置しており、遺跡の北方一・五キロメートルには月桂洞長鼓墳がある。

新昌洞では初期鉄器時代(紀元前二〜一世紀)の沼と池跡、土器の窯跡、排水施設、建物跡、甕棺墓など古代の農耕文化生活と関連した遺跡が集中している。甕棺墓は遺跡の西方の丘陵傾斜地に五三基が分布している。出土遺物は無文土器と平底長頸壺などの土器類、青銅製刀剣の柄の裝飾、石斧、石鏃、土掘り道具かと推定される鉄器などがある。沼と池の跡は柴山江の氾濫によって形成されたもので、出土遺物は櫛、クワ、蓋、黒漆を全面に塗った剣の鞘や馬車の車輪などの木器や木製品類、黒色磨研土器を含む土器類、漆器類、石器類と炭化米、炭化麦、稲の種、杏の種、胡桃の種、きゅうりの種などの種子類、淡水貝類、魚の骨、獣の骨などがある。この低湿地から漆が塗布されていない未製品の状態で扇の柄状の木製品が出土している。

④金海・鳳凰洞遺跡(慶尚南道金海市・図3の2)⁽²⁸⁾

東亜文化研究院によって、二〇〇四年に金海・鳳凰洞遺跡で木棺墓が発掘調査され、第三号木棺墓と番号された割貫式木棺から、二個体の「扇」が出土したと報じられている。これらの二個体の「扇」は柄が交差した状態で配置されていたという。この墓からは他に漆塗の鞘に入った銅剣、土器類と漆器類が出土したという。この遺物については、概報の段階であって、年代については今後の精査と報告をまつほかはないが、暫定的には一〜二世紀前半頃と報じられている。

このように韓国の原三国(三韓)時代には、墳墓を中心として、「扇」とされる遺物の出土例が知られてきている。これらに対する専論としては、管見の限りでは李健茂氏の論考が知られる。すなわち、李健茂氏は、この種の遺物について、原三国時代における高位の人物が威儀具あるいは指揮のための象徴物として使用した可能性が高いと述べ、剣、楽器などとともに祭儀や巫儀すなわち巫覡による祈禱などとして使用された可能性を指摘している。⁽²⁹⁾

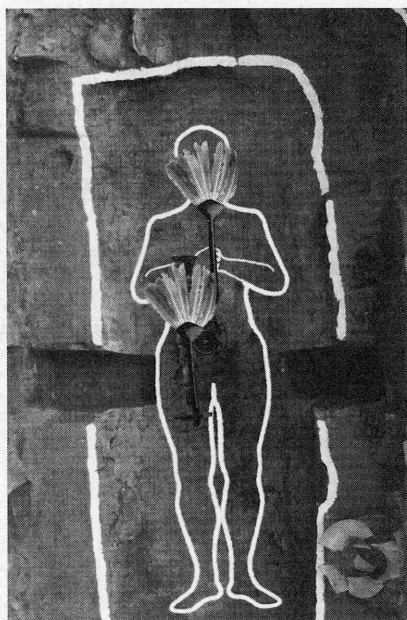
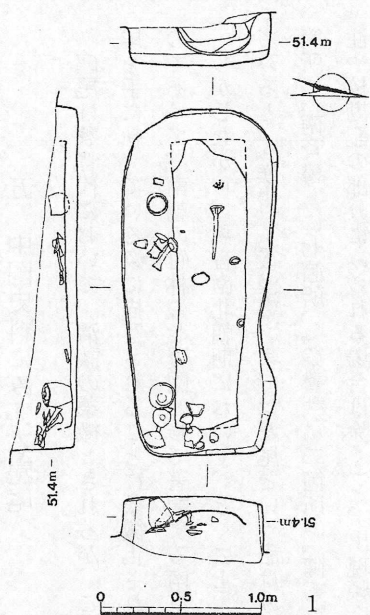


図3 韓国出土の塵尾 (2)

1 星州・礼山里30号墓塵出土状況 2 金海・鳳凰洞遺跡2号木棺墓



図4 安岳3号墳墓主像と墓主の執る塵尾

五 中国史料にみえる塵尾

塵尾は魏晋代において、清談の象徴とされるが、これはいわゆる竹林の七賢が図像として表現される場合に、塵尾を手執っている姿に描写されることに象徴化される。ただし、このような図像は後代の絵画表現に特徴的なものであって、南朝の竹林の七賢図として著聞する南京・西善橋南朝墓の磚画には塵尾を執る表現はない。⁽³⁰⁾

しかしながら、魏音南北朝期において、とくに士大夫層の間で塵尾の流行をみたことは疑いなく、史書を検索してみると、『漢書』『後漢書』までは塵尾という語はみえず、事項の重出を含むが、『晋書』に八箇所、『宋書』に一箇所、『南齊書』に七箇所、『梁書』に二箇所、『陳書』に二箇所、『南史』に一二箇所、『北齊書』に一箇所(ただし、注や校勘記の部分にみられる場合は除く)と、出現頻度の上でも魏音南北朝期に限ってみられる語であることが知られる。高句麗古墳壁画に描かれる塵尾と同時代の文献に現れる記載に関しては、かつて論じたことがあるが、⁽³¹⁾煩を厭わず、魏音南北朝期における清談や老荘思想、そしてそれによる超俗と塵尾の関係を示すものとして、史料をひきながらみていきたい。

西晋の王衍(夷甫)は才能に恵まれ、容姿端麗で明晰なこと神の如く、常に白ら子貞に比していた。彼は哲学談論の妙手であつて、老荘を談ずるのを事とし、いつも白玉の柄の塵尾を握り、手の色と区別がつかなかった。⁽³²⁾ここではやはり専ら老荘を談ずる才に長けた王衍を際立たせる道具だとして、さらに彼の白玉の如き端麗さを示す、手と見分けのつかない白玉の塵尾として、二つの意味あいでも用いられている。

清談における塵尾の有様を具体的に示す例としては、東晋代の孫盛の逸話がある。彼は殷浩と相対し、清談界で名を馳せていた。孫盛は殷浩のところへ行って談論し、向かい合つて食し、塵尾を奮い、その毛が悉く飯中に落ちて、食事は冷めてまた暖める事四度に及び、暮れるに及んで餐を忘れ、理境定まらなかった、という。⁽³³⁾この情景の

描写には多少の潤色を受けているとしても一時の談論の風潮を察するに余りある。

また、『南齊書』には、琅邪の王僧虔の次のような逸話が載せられている。劉宋から南齊の人である王僧虔は、その子を戒める書の中で、自分は玄学に心をひかれ若い頃から老年に至るまで、多くを学び、数十家の註を通読したが、それでもまだ軽々しく談論しようとは思わない。ところがおまえは老子の卷頭五尺ばかりを開いただけで、王弼や何晏が何を言っているのかも知らないくせに、すぐ塵尾を振り回し、自ら談士を以って任じている。これは甚だ危険なことである。もし、衰聚などの偉い人達から、易や老莊の言葉について質問を受けたような場合には、まだ見ておりませんなどと返事ができるものであろうか。⁽³³⁾この記述に対しては、清談本来の使命であるあつた脱俗求真という精神が失われて、ただ貴族の教養の高さを示す行動として定型化されて行くことの事例としてあげられている。⁽³⁴⁾

同様に塵尾が士大夫層の教養を象徴するものとして、『陳書』にみられる次の記述をあげよう。あるとき陳の後主が東宮にあり、官僚を集めて宴を設けたところ、玉柄の塵尾が出来土がつてきたので、後主は親しくこれをとつて、「⁽³⁵⁾当今また士多きこと林の如くといえども、これ捉るに堪える者に至つては、独り張譲あるのみ」といつて、梁代からすでに談論に名を得ていた張譲に授けた。優品である玉柄の塵尾が、これを執る人物を選ぶというこの記述は、塵尾そのものが士大夫層における教養としての清談の雅度を象徴的に示している。この話には後日談があり、後主が鐘山の開善寺に幸した時、從臣を召して、寺の西南にある松林の下に座らせ、勅して張譲を召し、堅義義理を説いて明らかにすること⁽³⁶⁾を命じた。その時、塵尾を求めたが、届かなかつたので後主は勅言して松の枝を取らせ、これを張譲に手渡し、「塵尾に代えるべし」といつた。⁽³⁷⁾

これらの記述は南朝末にいたるまで形式的にせよ清談の余俣が残つたものとみられている。⁽³⁷⁾そして、士大夫の清談にはこの時期にいたつても塵尾が不可欠であつたことを示している。同様に南朝末における清談と塵尾の関係を

示すものとして次のような記述がある。『陳書』によると陳郡の袁憲は十四才の時に召されて、梁の国士正言生となった。あるとき、国子博士の周弘正は講座に登ろうとしていたところで、弟子を集めてあったので、袁憲を部屋に引き入れ、塵尾を授けて、樹義を命じた。同席していた謝岐と何妥とに、周弘正は命じて論難數番を試みさせたが、袁憲を屈服させることができない。この時、学衆は堂に満ち、観る者は里沓する有様であったが、袁憲の態度は自若としており、弁論には余裕があつたという。ここでもやはり清談に臨む際に崖尾を執っている様子がみとれる。

このような清談や老荘のような超俗の象徴としてのみならず、塵尾はそれ以前に魏晉南北朝期の士大夫たることを示す必需の品として表されることが多い。次に、いくつかの史料をあげて、このことを示しておこう。

呉苞は儒学、礼書、老・莊の学を善くし、南朝・宋の泰始年中に徒弟を集めて学を講じたが、彼は黄葛巾の冠をつけ、竹で作った塵尾をもち、二十年余りも粗末な食事を続けた。のち、隆昌元年（四九三）に南齊の武帝が、当時の彼の評判を聞いて太学博士に召しだそうとしたが、呉苞はこれを固辞した。呉苞のそのような学問に臨む清貧な姿勢を象徴するものとして竹製の塵尾が用いられているのである。竹の粗末な塵尾を清貧さの徴証としたこの逸話からは、逆にその当時、処士であつても一個の独立自尊の人間として備えるべき持ち物の一つとして塵尾が認識されていたことを知ることができよう。

同じく塵尾が士大夫にとつて、常に携行するごく一般的な持ち物であることは、例えば魏晉南北朝期の史料中には、「塵尾を挙げて口を掩いて笑う」などの表現が散見されることから知られる。すなわち、太尉で潁川の庾亮は武昌と江州を併せ領した。庾亮は孟夏を属僚として招き、孟夏が任地へ行つてみると、庾亮は引見して風俗の得失を問うた。孟夏が、これに答えて「役所に帰つて、官吏に問いましよう」と言つた。庾亮は塵尾を挙げて口を覆つて笑つた。弟の翼に、孟嘉は盛徳の人なり、と言つた。⁽⁴⁾

塵尾はこのように士大夫層の一般的な持ち物であり、持ち主の体に馴染んだ愛着深いものであったがゆえに、埋葬に際して、棺の中に置かれることもあった。東晋の王濛が病篤いなかで、灯火のもとで塵尾を回しながらこれを見つめ、嘆息して言った。「これほどの男が四十まで生きられぬとは」⁽⁴⁾。彼は三九歳で卒した。劉尹は殯に臨んで、王濛が愛用していた犀角の柄の塵尾を棺の中に納め、長く慟哭した、という。この場合は、とくに生前の持ち物であるとともに、持ち主である王濛自身が亡くなる直前に塵尾を持って、嘆息したがゆえに、棺の中に納められたのであろう。

また、塵尾は士大夫の必需品であつたがために、贈答に用いられたり、さらには皇帝から下賜されることもあつた。王濛は晋の開国の功臣である王沈の子であり、八王の乱にあたつて、幽州刺史として、早くより自立の志を有した。五胡十六国の一に数えられる後趙を建国した石勒は建興二年三月に襄国の市で王濛を斬するが、それに至る過程で以下のようなやりとりがあつた。王子春らは王濛の使者とともに襄国へ歸つた。石勒は精銳兵を隠して、使者に対して、車隊を脆弱にみせることを命じ、北面して使いを拝して、王濛に書した。王濛は石勒に塵尾を贈つたが、石勒はあえてこれを秋らず、壁に掛けて朝夕、拝した。そして、石勒はこう言つた。「私は王公に見えずとも、王公が賜つた物を見るだけで、公に見えているようだ」⁽⁵⁾。

この記事に対して、王勇氏は名族出身であり、年長の王濛が塵尾を贈ることによつて、奴隸出身で「羯胡」であり、漢族ではない石勒に新しい身分を認めたが、石勒自身はそれを身に余るものとして、執るのを慎み壁に掛けて拝んだのであろうと述べている⁽⁶⁾。この記述では、王濛より賜つた塵尾を石勒自身が執らないことで、まず謙讓の意を示し、それを壁に掛けて拝すること、さらなる敬意と恭順を表したことが読み取れる。ここでは、本来、手に執るべき塵尾を執らず、拝するということが、この文脈における恭敬の意味を象徴していることに注意しなければならぬ。この記事は王公、士大夫の間において、塵尾が間の贈答品や賜り物として用いられた場合の具体例とし

て興味深い史料である。

やはり、塵尾が士大夫として一定の格を示す逸話をあげよう。劉宋末に微賤の甲人から榮達した陳顥達は息子が貴族の師弟を見習つて革馬服飾を奔麗にするのを苦々しく思い、「塵尾扇は〔晋代の〕王氏と謝氏のような名家の物であり、おまえがこれをとつてこれに続くことをもとめてはいけない」と諭した、という⁽⁴⁴⁾。

皇帝から塵尾を下賜された例としては南斉の顧歡をあげよう。彼が官を辞して、郷里に隱遁する際に武帝は塵尾と素琴（飾りのない琴）を賜ったことが『南斉書』高逸伝に記されている⁽⁴⁵⁾。

葬送に関わる特殊な塵尾の用いられ方を示す例もみられる。南斉の奇人とされる呉郡の張融は若い頃に道士の陸脩静から白鷺の羽で作つた塵尾を贈られた。その時に陸脩静は「これは珍しい物であるから、優れた人に奉ずるのだ」と。張融は建武四年（四九七）に病で卒する際、通常は葬儀に用いる硫を用いず、葬祭を設けず、自分の死後人は人をして塵尾を持たせて屋根の上に登らせ、魂を復させるように建白した。⁽⁴⁶⁾張融が自らの学問の象徴として、珍奇な塵尾を重用し、葬祭に用いたというこの記述は、南朝末において、やはり塵尾が士大夫層に重んじられていた一面を示しているといえよう。

このように魏晉南北朝期における塵尾の用いられ方を實際にみてみると、塵尾が当時の士大夫階層にとつては象徴的な道具であり、また、その生活に密接に関わつていたことが知られよう。それゆえに塵尾は天子から臣に下賜されたり、他国への贈答に用いられたことがあつた。また、日常生活に密着した器物であるがために、遺骸とともに棺のなかに納められたり、死後の葬祭において用いられる場合もあつた。

このような魏晉南北朝期における塵尾のもつ属性については、すでに思想史の側面から、森三樹三郎氏の高論があり、塵尾は清談を象徴するものであるとともに、すでにふれた『南斉書』にみられた陳顥達が息子の奢華に流れることに對し、塵尾を象徴として諭した記述を引いて、塵尾が一流貴族であることを表示するための道具であつた

と端的に指摘している⁽⁴⁷⁾。要するに、塵尾は一般にいわれるように魏晋の士大夫の風度を示し、あるいは清談と密接に関わるのみならず、実際に魏晋の士大夫の生活や葬送に密着した器物であった。

この点において、塵尾は魏晋南北朝期の官人階層であり知識人である士大夫の生活や葬送に密着した器物であり、制度的な威儀具ではなく、慣習上および文化的な威信を示す道具であった。実際、魏晋南北朝期においては、士大夫層には欠かせない持ち物であるがうえに、上にあげた記述では、彼らの生活の節目や社会との関わりのなかで、あるいは政治上のとりわけて肝要な記載のなかに現れる場合だけが、ことさらに取り上げられているのであって、それ以外の日常平生の暮らしのなかでは、取り立てて顧みられることもないほどに、一般的な持ち物であったと考えてよい。逆に言えば、それほど普遍性をもつがゆえに、ことさらに魏晋壁画墓には描かれないことも多く、高句麗をはじめとした中原を離れた地域において、ことさらに墓主の持ち物として描かれたのであろう。

六 塵尾の東漸——中華文物の流入と「威信財」の実体——

さきに類例にふれたとおり、近年にいたり、羽扇が韓国の紀元前後から二、三世紀頃のいわゆる原三国時代遺跡から出土しており、東アジアにおいて、塵尾を含めた手に執る威儀具の東漸についての新知見として注目される。

とくに注目されるのは、その出土状態と出土位置であり、被葬者の身体に接して、かつ胸の部分に置かれ、さらに星州・礼山里のように元來着けられていた羽毛の部分が被葬者の顔面を覆うように置かれていた事例がある。

すでにふれたように韓国での出土例としては、茶戸里一号墓、一五号墓、二四号墓、三六号墓から黒漆塗りの塵尾の柄が出土していることが特記される。一号墓と一五号墓は盗掘坑からの出土であるが、二四号墓では、墓坑の中央部分から、羽毛が付けられていた部分を頭位の方角に向けた状態で出土しており、周囲から出土した銅剣など

との位置関係からみても、被葬者の胸部ないしは腹部に置かれていたと考えられる。三六号墓でも、三点の羽扇の柄が被葬者の胸の部分から出土している。その他には、低湿地に立地する光州・新昌洞遺跡でも出土している。これらに對して、すでにふれたように李健茂氏は原三国時代における高位の人物が威儀具あるいは指揮のための象徴物として使用した可能性が高いと述べ、劍、樂器などとともに祭儀や巫儀すなわち巫覡による祈禱などとして使用された可能性を指摘している。⁽⁴⁸⁾

このような見解に對して、筆者は塵尾が祭儀や祈禱などに用いられたとするならば、それは朝鮮半島在来の信仰や祭祀との関係で、中華世界においては士大夫たちが手に執る威儀具が在地的變化を遂げたものとして理解することが正鵠を射ていると考える。すなわち、原三国時代の朝鮮半島南部においては、魏晉南北朝の士大夫層における塵尾の使用法と同様に、顔を隠すという具体的な實際の使用状態が知られた点でも、中華世界での威儀である塵尾が物質としてのみならず、一定の文化背景とともに朝鮮半島に移入されていたことが明らかになったのである。

そして、上述したような中国における塵尾の意味と使用法から、さらに朝鮮半島においてそれがどのように伝えられていたかを勘案することは、日本における漢文化に依拠する塵尾の存否を考究するに際して、重要な論点を提示している。

以上、日本における塵尾の存否を論じるために、これまでの研究と周辺地域から知られた塵尾あるいは羽扇などの手に執る威儀具について瞥見してきた。その結果、手に執る威儀具そのものは後漢代には朝鮮半島南部まで流入していたことも、原三国時代の出土例によって知られたのである。

いっぽう、塵尾を持つ墓主の正面像は、高句麗地域では安岳三号墳、徳興里古墳に描かれており、その他では酒泉・丁家閘五号墓、北京市・八角村魏晉墓、雲南・昭通後海子東晉墓などにみられる。地域的には高句麗とは相当に離れた地域が多く、また、北京市・八角村魏晉墓を除くと、雲南、甘肅などの中原地域からは隔たったいわゆる

辺境地域において類例が知られることも注意してよからう。

塵尾そのものではないが、おそらく同様の器物と考えられる羽扇の実物が韓国・茶戸里一号墓、一五号墓、二四号墓、三六号墓などから出土していることに現れているように、やはり中原文化から遠く隔たった地域で発見されていることと矛盾しない。

そして、このような茶戸里遺跡の墳墓から出土した羽扇は、たんに中華世界の文化を取り入れたというよりは、『三国志』魏書韓伝に記されるように、諸韓国の有力者である臣智には邑君の印綬を与え、次の者は邑長となし、さらに下位の下戸が楽浪郡や帶方那に来る時も皆、衣服や被り物（幘）を仮し、自ら印綬を持ち、衣服や被り物を着けている者が一〇〇人以上もいる、⁽⁴⁹⁾という内容を実際に現す例と考えたい。すなわち、中華世界における階層を具現する器物の一種として用いられたものが羽扇であり、塵尾であると考えられる。この点において、原三国時代における羽扇の出土は、すでに中華世界における身分表徴の意味が、この時点で朝鮮半島南部にまで展開していたことを物語る資料であつて、高句麗壁画古墳における塵尾表現の史的環境に結びつくものと位置づけられる。

その後、すでにふれたように魏晋南北朝時代にいたると塵尾は清談を象徴するものであるとともに、一流貴族であることを表示するための道具となつた。⁽⁵⁰⁾すなわち、魏晋南北朝期には、少なくとも士大夫階層には欠かせない持ち物であつたといえよう。

そして、この種の器物が高句麗壁画古墳に描かれるのも、同様な意味から中原から離れた地域において、被葬者が自らの位置づけを示すものと考えたい。たとえば、塵尾を執る墓主像が描かれていることで著聞する安岳三号墳（図四）は、遼東地域からの亡命者である「冬寿」が葬られているのであり、墨書に記されている彼の官位は実職であつた可能性は少ないけれども、中華世界のそれである。

このような政治的な立脚点とは次元を異にして、亡命漢人である冬寿は、墓内に塵尾を執る自らの像を描くこと

によつて、士大夫としての矜持を示し、社会的にいわば中華世界に属することの自己同一性を保持したものではないかと考えるのである。この見方は憶測に過ぎるとされるかもしれないが、安岳三号墳より約半世紀遅れて築造された徳興里古墳の被葬者である「鎮」は塵尾を執る姿で描かれており、彼は墨書銘文より来歴の明らかな亡命漢人であり、元来は中華世界の人士であることが知られるのである。しかも、「鎮」の場合、墨書銘文には中華世界における官位のみならず、高句麗の官位も用いており、「冬寿」よりさらに高句麗社会への一段の包摂化がみられることは、これまでの指摘どおりであらう。^⑤

このように徳興里古墳の墓主である「鎮」は、高句麗社会への自己投入が進んではいるが、高句麗壁画古墳に特徴的な「樹木図」の存在に典型的に示されるように、壁画自体は高句麗の在地性がつよい画像が描かれ、かつ人物や服装の表現にも高句麗の色彩が濃厚な徳興里古墳においても、「鎮」その人を描いた墓主像においては、ことさらに塵尾を執る姿として表現されていることは、各々、対称をなすものとしてとらえられよう。すなわち、安岳三号墳の墓主である「冬寿」よりもさらに高句麗社会に融合したとみられる「鎮」においても、おそらく塵尾は士大夫の象徴として描かれたのであり、このことは徳興里古墳の墨書銘文に「鎮」の出身地が後漢時代を中心とした地名によつて記されていることとも対応する。すなわち、この墨書地名そのものが後漢代の理想的社会の典型として象徴的に記されたとするならば、墓主像は中華世界の士大夫たる「鎮」自身が塵尾を執ることによつて具現したものとみることができよう。すなわち、徳興里古墳の墓主に関する墨書と壁画の表現は、具象化された漢人世界における士大夫たる「鎮」を表現したものに他ならないと考える。

これはさきほど見たように、塵尾を執る墓主像が中華世界の中心からは隔たつたいわゆる辺境および辺郡にも、認められることも深く対応していると忠われる。すなわち、辺境あるいは辺郡における中華世界の秩序への傾斜と、高句麗における亡命漢人の置かれた状況が、徳興古墳墨書における被葬者「鎮」の出自に端的に示されている

ように、中華世界の風俗や慣習を自己同一性の拠り所としている面と、それらの墓主像に塵尾を執る構図を採用した背景とは見事に一致しているといつてよい。このような思惟の背景を考えるに際しては、つとに指摘されているような五胡十六国時代における漢族の胡族観が参考となる。すなわち、胡族に対して、漢族には文化的優越感に伴う夷狄視が存在する反面、胡族に対する漢族の政治的劣勢に伴う屈辱感などを抱懷していたとされる。おそらく、自らの像に塵尾を執る構図を選択した亡命漢人たちは、高句麗の国や人に対して、これと同様な思いを抱いていたのではないかと思量する。

すでに別稿で論じたが、高句麗古墳壁画の墓主像が手に執る塵尾にここまでみてきたような意味を認めるならば、塵尾を執る墓主像が描かれている台城里一号墳に対しても、同様の塵尾の意味合いを見出させることになる。すなわち、士大夫としての墓主を表現する道具だとしての塵尾であつて、被葬者が中華世界への自己同一性の拠り所を欲していることを意味する。それは安岳三号墳の墓主である「冬寿」や徳興里古墳の墓主の「鎮」と同様に台城里一号墳の被葬者も中華世界における士大夫であることを拠り所とする人物、すなわち亡命漢人であることを示すものと理解されるのである。

塵尾に含意されるこのような意義は、これを保持することによつて儒教を中心とした教養や思想を共有する社会を背景とした同質の価値観のなかで、相対的な精神性に根ざす尊厳を高めるものであつて、それは政治的な位階や身分とは異なる次元の権威を示す表徴といえよう。

このような考察をもとに、最後に日本出土の威儀具とされる木製品および人物埴輪の手にもつ器物について、一言するならば、中国の魏晋南北朝および朝鮮半島の三韓から三国時代にかけて存在した塵尾については、これを所有する階層の教養や知識を媒介とした文化的かつ慣習的な威儀の可視的表徴であり、その意味で古墳時代を中心とした出土する素環頭把装具に関しては威儀具であることの積極的な傍証を見出すことは難しい。とくに塵尾を執る

姿態を表したとされる人物埴輪では、出土位置や服装・装身具などの面でも、それらが首長階層に限定されることが確定できない。この点からも中国古代の士大夫の威儀具としての塵尾が文化や思想的な背景をともなつて、古墳時代の日本列島に流入し、かつ流布したとは考えがたい。

これについては、百済における中国陶磁器をはじめとした中国南朝遺物の出土質量と比した場合、日本の古墳時代では南朝系遺物が寡少な点からも、日本への塵尾の直接的な移入を想定することは難しい。この点から、むしろ、出土数の増加をみている在来の木製威儀具との関連を想定するほうが時空的な整合性がある⁵⁶。

また、弥生から古墳時代の木製威儀具とされる遺物も地域における拠点的な集落等から出土する傾向にあることは、先行研究に示されている。しかしながら、日本の出土例は墳墓に伴う場合が、ほとんどない。この点について、属人的な威儀具である中国およびそれが移入された朝鮮半島の塵尾とは、決定的な差異が存する。

ここまでの考察からは、中国古代の塵尾の形態的な影響関係までは否定しうる積極的な材料はないとしても、素環頭把装具と呼ばれる日本出土の柄のついた木製品が、直接的に中国の塵尾の移入によつて出現したことについては、他の傍証がない現状では肯定することは難しい。すなわち、本論で縹縹述べてきたような魏晋南北朝期における思想的背景をも内包する器物である塵尾について、日本の古墳時代において、形態としての模倣までは否定できないにしろ、その文化的総体として受容したとする考古学資料および文字資料の証左はない。よつて、現時点において団扇形木製品をも含む日本出土の柄付威儀具とされる類型については、その他の在来の木製威儀具とされる遺物の系統にあり、古墳時代に特徴的な木製品として、いったん理解しておきたい。

七 結語

本論ではしばしば中国の塵尾との類似が指摘される木製の素環頭把装具とされる類型について、朝鮮半島で出土

した類似遺物や中国の塵尾に関する文献記載との対照検討を行った。以下に本論の論旨を整理し、結語にかきたい。まず、はじめに塵尾との類似が論じられる木製素環頭把装具の典型的な例をあげて、形態の特徴や出土時期などの事実関係を提示した。そしてこの種の遺物の出土例により、その盛行期には、従前の指摘のように古墳時代を中心としていることを示した。

次に木製威儀具とされる遺物の研究史について、とくに素環頭把装具を中心として整理し、これを中国古代の塵尾の模倣品であることに由来する威信財とする説と「大和政権」などと呼ばれる在来 of 政治勢力 of 政治的影響を具現する威儀具であり、威信材であるとする見方があることを述べた。

これに基づいて、素環頭把装具が塵尾を模倣した、いわば中国的な權威を含意する威信財であるという見解に対して、韓国での「扇」として報告されている塵尾や中国文献と史料にみられる塵尾の意味から検証を行った。その結果、中国史料や文献では塵尾に関する記載が魏晋南北朝期に集中してみられることを示した。そのような文献記述の内容から、塵尾は魏晋代を主として、南北朝期にいたるまで士大夫の風度を示し、あるいは清談と密接に関わるのみならず、実際に魏晋南北朝期の官人階層であり知識人である士大夫の生活や葬送に密着した器物であり、制度的な威儀具ではなく、慣習上および思想・文化的な威信を示す道具であることを証した。

そして、このような意味を有する塵尾は、原三国から三国時代の朝鮮半島には、おそらく本来的な意味において将来されていることを、当該時期の出土例および伴出遺物などから想定した。しかしながら、塵尾の背景となる魏晋南北朝期の文化や思想の直接的な移入を明確に示す古墳時代における中国製ないし中国系遺物の存在は、出土遺物としての質量の面からは実証しえない。よって、すくなくとも塵尾が魏晋南北朝期の思想や文化的な背景をともなつて、弥生から古墳時代の日本列島内で流布していたかどうかについては否定的にならざるをえない。本論でふれた素環頭把装具は、他の種類の木製祭祀具などとも出土する傾向がつよいことから、古墳時代における在来

的な木製祭祀具または威儀具として位置づけることが、現時点では、もつとも堅実な見方であって、中華世界の威信財が日本列島に移入されたかは、異なる方法によって証するべきであろう。

註

- (1) 能登川町教育委員会『能登川町埋蔵文化財調査報告書 第一〇集―斗西遺跡―』一九八八年
- (2) 奈良県立橿原考古学研究所編『野山遺跡群Ⅲ』奈良県教育委員会 一九九二年
- (3) 大阪府文化財調査研究センター編『下田遺跡…都市計画道路常盤浜寺線建設に伴う発掘調査報告書―』一九九六年
- (4) 藤田憲司「塵尾について」大阪府文化財調査研究センター編『下田遺跡―都市計画道路常盤浜寺線建設に伴う発掘調査報告書―』(前掲)
- (5) 橿原考古学研究所博物館編「権威の象徴―古墳時代の威儀具」橿原考古学研究所博物館、二〇〇〇年
- (6) 大阪府文化財センター編『出土木器が語る考古学…弥生時代・古墳時代の諸様相―』財団法人大阪府文化財センター、二〇〇七年
- (7) 大阪文化財センター『新家(その1)』一九八七年
- (8) 大阪府文化財調査研究センター『新家遺跡第6次発掘調査報告書…大阪府道高速東大阪線東大阪ジャンクション建設に伴う発掘調査』一九九五年
- (9) 中央幹線内遺跡調査会『中央南幹線下水管築造に伴う遺跡の調査』一九七一年
- (10) 大西貴夫「勝山古墳第2次・纏向遺跡第Ⅲ次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』一九九八年度(第二分冊)、一九九九年
- (11) 島根県教育委員会『姫原西遺跡』一九九九年
- (12) 奈良県立橿原考古学研究所「乙木・佐保庄遺跡」二〇〇五年
- (13) 鈴木裕明「翳(団扇)形木製品について」奈良県立橿原考古学研究所『乙木・佐保庄遺跡』
- (14) 鈴木裕明「団扇形木製品の展開とその背景」『初期古墳と大和の考古学』学生社、二〇〇三年
- (15) このような「団扇形木製品」に中国の塵尾の影響を想定する見解(前掲の鈴木裕明論文)もあるが、筆者はこれについては、実証する資料を欠くため、現段階ではとしない。
- (16) 塚田良道「塵尾について」『埴輪研究会誌』一、一九九五年のち同氏『人物埴輪の文化史的研究』雄山閣、二〇〇七年所収。
- (17) 藤田憲司「威儀具(塵尾)について」大阪府文化財調査研究センター編『下田遺跡…都市計画道路常盤浜寺線建設に伴う発掘調査報告書』第二分冊(前掲)

(15) 鈴木裕明「翳（団扇）形木製品について」（前掲）

鈴木裕明「団扇形木製品の展開とその背景」（前掲）

(16) 鈴木裕明「古代中国の塵尾と翳」「由良大和古代文化研究会研究紀要」七、二〇〇二年

(17) 王勇「塵尾雑考」「仏教芸術」一七五、一九八七年

王勇「塵尾興衰史—宗教思想史的研究」「汲古」一八、一九九〇年

(18) 孫機「諸葛亮的『羽扇』☆」「文物叢談」文物出版社、一九九一年＊ 初出は「文物」一九八〇—三＊

(19) 黄吉軍・黄吉博「塵尾浅説—从朱村出土曹魏壁画墓塵尾図説起」「洛陽考古発掘与研究」一九九六年＊

(20) 李健茂「茶戸里遺跡出土扇柄について」「考古学誌」一〇、一九九九年＊

(21) 李健茂・李栄勲・尹光鎮・申大坤「義昌茶戸里遺跡発掘進展報告（Ⅰ）」「考古学誌」一、一九八九年＊

(22) 李健茂・尹光鎮・申大坤・金斗喆「昌原茶戸里遺跡発掘進展報告（Ⅱ）」「考古学誌」一九九一年＊

(23) 李健茂・尹光鎮・申大坤・鄭聖喜「昌原茶戸里遺跡発掘進展報告（Ⅲ）」「考古学誌」五、一九九三年＊

(24) 李健茂・尹光鎮・申大坤・鄭聖喜「昌原茶戸里遺跡発掘進展報告（Ⅳ）」（前掲）

(25) 李健茂・尹光鎮・申大坤・金斗喆「昌原茶戸里遺跡発掘進展報告（Ⅴ）」（前掲）

(26) 鄭昌熙「星州礼山里木棺墓発掘調査概要」「高句麗考古学の諸問題」第二七回韓国考古学会全国大会要旨集、二〇〇三年＊

(27) 趙現鐘・申相孝・張育根「光州新昌洞低湿地遺跡・国立光州博物館、一九九七年、一〇八—一一、一二七—八頁＊

(28) 東亜文化研究院編「金海加耶の森造成敷地内第3号木棺墓現場説明会資料」東亜文化研究院、二〇〇四年一月二八日＊

(29) 李健茂「茶戸里遺跡出土扇柄について」（前掲）

(30) 南京博物院・南京市文物保管委員会「南京西善橋南朝墓及磚刻壁画」「文物」一九六〇—八・九＊

(31) 『晋書』卷四三列伝第三・王戎／從弟衍
衍既有盛才美貌、明悟若神、常自比子貞。兼声名籍甚、傾動当世。妙善玄占、唯談老莊爲事。每捉玉柄塵尾、與手同色。

『世說新語』容止篇

王夷甫容貌整麗、妙於談玄、恒捉白下柄塵尾、与手都無分別。

(32) 『晋書』卷八二・列伝第五二・孫盛

岱嘗詣浩談、論、对食、鶯柳塵尾、毛悉落飯中、食冷而復暖者數四、至暮忘餐、理寃不定。

『世說新語』文学篇

孫安国往股中单許共論、住反精苦、客主無間、左右進食、冷而復煙者數四、彼我奮柳塵尾、悉脫落、滿餐飯中、賓主遂至莫忘食。

(33) 『南齊書』卷三三・列伝第一四

僧度宋世嘗有書、誠子曰、…（中略）…吾未信汝、非徒然也。往年有意於史、取三国史聚置床頭、一日許、復徒業就玄、

自当小差於史、猶未近彷彿。曼情有云、談何容見諸玄、志為之逸、腸為之抽、專一書、輒調數十家注、自少至老、手不釋卷、敢輕言。汝開老子卷頭五尺許、未知輔嗣何所道、平叔何所說、馬・鄭何所異、何所明、而便盛於麀尾、自呼談士、此最險事。設令衰令汝言易、謝中書挑汝張吳興叩汝老、端可復言未嘗看邪。

- (34) 森三樹三郎「第一章六朝士大夫の性格とその歴史的環境」、『六朝士大夫の精神』同朋舎一九八六年とくに四八〜九頁。

- (35) 『陳書』卷二四・列伝第一八

易。尚未指例言莊、後主在東宮、集官僚置宴、時造玉柄麀尾新成、後主親執之、曰「当今雖復多士如林、至於堪捉此者、独張護耳」。即手授言幾。

- (36) 『陳書』卷二四・列伝第一八

後主嘗幸鐘山開善寺召從臣座於寺西南松林下、勅召機賢義。時索麀尾未至、後主勅取松枝、丁以屬磯、口可代麀尾。境。森三樹三郎「第一章六朝士大夫の性格とその歴史的環境」、『六朝士大夫の精神』(前掲)

- (38) 『陳書』卷二四・列伝第一八・袁憲

：憲時年十四、被召為國子正言生。：公弘正將登講座、弟子畢集、乃延憲入室、授之麀尾、令憲樹義。時謝岐、何妥在座、弘正謂曰、二賢雖窮與蹟、得無揮此後生耶。何・謝於是通起義端、深極理致、憲与往復數番、酬對閑敏。：時字衆滿堂、觀者重沓、而憲神色自若、弁論有余。

- (39) 『南齊書』卷五四・列伝第三五・高逸／吳苞

吳苞字天蓋、濮陽鄆城人也。儒学、善三礼及老莊。宋泰

始中、過江聚徒教学。冠黃葛巾、竹麀尾、疏食二十余年。隆昌元年、詔曰处士濮陽吳苞、栖志穹谷、乘操貞固、沈情味古、白首弥厲。徵太学博士、不就。

- (40) 『晋書』卷九八・列伝第六八・桓温

孟嘉字万年、江夏鄆人、吳司空宗曾孫也。嘉少知名、太尉庾亮領江州、辟部廬陵從事。嘉還都、亮引問風俗得失、对曰、還伝当問吏。亮举麀尾掩口而笑、謂弟翼曰、孟嘉故是盛德人。

- (41) 『晋書』卷九三・列伝第六三・王濛

：疾漸篤、於燈下輒麀尾視之、歎曰、如此入曾不得四十也。年三十九卒。臨殯、劉惔以犀杷麀尾置棺中、因慟絕久之。

『世說新語』傷逝篇

- (42) 『晋書』卷一〇四・載記第四・石勒上

王長史病篤、寢臥燈下、輒麀尾視之、歎曰、如此人曾不得四十。及亡、劉尹臨殯、以犀杷麀尾著柩中、因慟絕。

- (43) 『南齊書』卷二六・列伝第七・陳顯達

子春等與王浚使至、勒命匿勁卒精甲、虛府羸師以示之、北面拜使而受浚書。浚遣勒麀尾、勒偽不敢執、懸之于壁、朝夕拜之、云我不得見王公、見王公所賜如見公也。復遣董肇奉表于浚、期親詣幽州奉上尊号、亦修牋于棗嵩、乞并州牧、広平公、以見必信之誠也。

- (44) 『南齊書』卷二六・列伝第七・陳顯達

(永明)八年、進号征北將軍。其年、仍遷侍中、鎮軍將軍、尋加中領軍。出為使持節、散騎常侍、都督江州諸軍事、征南大將軍、江州刺史、給鼓吹一部。顯謙厚有智

計、自以人微位重、每遷官、常有愧懼之色。有子十余人、誠之曰、我本志不及此、汝等勿以富貴陵人。家既豪富、諸子與王敬則、竝精車牛、麗服飾。當世快牛称陳世子青王三郎烏、呂文顯折角、江瞿曇白鼻。顯達謂其子曰塵尾扇是王謝家物、汝不須捉此自逐。

(45) 『南齊書』卷五四・列傳第三五・高逸／顧歡

上書曰：吳郡顧歡、散騎郎劉思効、或至自丘園、或越在冗位、竝能獻書金門、薦辭鳳闕、辨章治體、有協朕心。今出其表、外可詳挹所宜、以時敷奏。歡近已加旂賞、思効可付選銓序、以顯謙言。」歡東歸、上賜塵尾、素琴。

(46) 『南齊書』卷四一・列傳第二二・張融

融年弱冠、道士陸脩靜以白鷺羽塵尾扇遺融、曰、此既異物、以奉異人。建武四年、病卒。年五十四。遺令建白族無旅、不設祭、令人捉塵尾登屋復魂。

(47) 森三樹三郎『六朝士大夫の精神』同朋舍、一九八六年、四八～九頁

(48) 李健茂「茶戸里遺跡出土扇柄について」(前掲)

(49) 『三國志』魏書・卷三〇・烏丸鮮卑伝・東夷

景初中、明帝密遣帶方太守劉昕、樂浪太守鮮于嗣越海定二郡、諸韓國臣智加賜呂君印綬、其次與邑長。其俗好衣幘、下戸詣郡謁、皆仮衣幘、自服印綬衣幘千有余人。

(50) 門田誠一「高句麗壁画古墳に描かれた塵尾を執る墓主像―魏晉南北朝の士大夫としての描画―」『鷹陵史学』

三三、二〇〇七年

(51) 李成市「東アジアの諸国と人口移動」田村晃一ほか編『新版日本の古代』二「アジアからみた古代日本」角川書店、一九九二年

(52) 武田幸男「徳興里壁画古墳被葬者の出自と経歴」(前掲)

(53) 川本芳昭「魏晉南北朝時代の民族問題」汲古書院、一九九八年、二九～三三頁

(54) 門田誠一「高句麗壁画古墳に描かれた塵尾を執る墓主像―魏晉南北朝の士大夫としての描画―」(前掲)

(55) このような木製威儀具とされる遺物の系譜について、中国の塵尾にその淵源がもとめられるかどうかについて、現状では肯定も否定もできないが、文化的、思想的背景とは別に形態のみを中国の威儀具に模倣し、形骸化したことは蓋然性がある。

(末尾に※を付したものは中国語・ハングルの文献)

図出典

図1―4 檀原考古学研究所博物館編「権威の象徴―古墳時代の威儀具」(前掲)

図4 朝鮮遺跡遺物図鑑編「朝鮮遺跡遺物図鑑」2 高句麗編、高麗電子出版、二〇〇二年

上記以外は註にあげた各遺跡の報告書によった。

